



民生委員・児童委員通信

# しあわせ

HAPPY NETWORK

No.7 平成20年9月16日

発行 守山市民生委員児童委員協議会

事務局 守山市社会福祉協議会  
住所 守山市下之郷町592番地の1  
TEL 077-583-2923



6月24日(火)、守山市民生委員児童委員協議会は、県外研修として、三歳の時に病魔のため両手両足を切断するという重い障害を抱え、度重なる逆境の中でも、生涯人間としての誇りを失わず、たくましく人生を生き抜き、ヘレンケラー女史をして「私より不幸な、そして偉大な人」と言わしめた中村久子女史(1897〜1968)に学ぶべく、女史の生誕地である岐阜県



【当日の講師】  
中村富子さん

**県外研修を実施する  
「中村久子女史に学ぶ」**  
「ないものは、その現実を素直に受け入れてこそ、幸せや真実が生まれてくる」

## 平成20年度総会開催



平成20年5月23日(金)、すこやかセンターにて市内民生委員・児童委員138名の内119名が出席し、守山市民生委員児童委員協議会総会を開催しました。

総会終了後、全員研修として元滋賀県民生委員児童委員協議会連合会事務局長の深田弥行氏より「忘己利他」というテーマでご講演をいただき、民生委員・児童委員の意識の持ちようや役割について再認識することができました。今後も、このような活動を推進していき、福祉の向上に繋がってきたいと考えています。



【当日の講師】  
三島多聞さん

高山市を訪問しました。そして、三島多聞氏(中村久子女史顕彰会事務局代表)からは「中村久子女史に学ぶ」、次女の中村富子氏からは「母を語る」と題するご講演をいただき三時間に及ぶ研修となりました。講師お二人の「泥中の蓮たれ」、「ないものは、その現実を素直に受け入れてこそ、あつて当然と考えているものにも感謝の心が芽生え、そこから幸せや真実が



13才の頃には、口に日本ハサミや毛筆をくわえて裁断や習字が出来るようになった。



中村久子さん

■中村久子女史の著書  
『宿命に勝つ』『無形の手と足』『生きる力を求めて』『私の超えて来た道』『こころの手足』等があります。

生まれてくる」、「努力の中に真心があれば、どんな苦難も乗り越えられる」、「時には手を貸さず、黙って見守ることが、本当の援護である」などや宗教教育の大切さを説かれたお話は、研修に参加した民生委員・児童委員一人ひとりの心に深く刻ま

れました。特に三島多聞氏は地元の民生委員・児童委員としての活動実績もあり、その経験を踏まえたお話は、今後、私たちが活動していくうえで参考となるものが多く、大変意義深い研修となりました。



自作の人形とともに。



## 「敬老月間に想う」

守山市長 山田 亘 宏

民生委員・児童委員の皆様には、日々、高齢者福祉をはじめとして、地域福祉の向上にご尽力を賜り、厚くお礼申し上げます。敬老月間にあたり、多年にわたる社会に貢献された高齢者に敬意を表し、その長寿を心からお祝い申し上げます。

さて、日本の社会は、少子高齢化の急速な進展と人口減少社会への突入、さらには、核家族化の進行、情報化社会の進展などにより、人間関係や地域での地縁的繋がりが希薄化しています。

こうした中で、今以上に医療や介護、障害者や子育てへの支援などのサービスの充実が求められると同時に、年々社会保障費が増加しています。

今日の逼迫した財政状況の下で、地域の課題に的確に対応していくためには、市民の皆様が主体的に役割分担していただき、皆様の「汗と知恵と経験」をまちづくりを生かしていくこと、いわば「地域づくり」、私が市政運営の基本とする、「市民が主役のまちづくり」であります。

高齢者の皆様には、長い人生を過ごしてこられた豊かな経験や知恵、技能を若い世代に伝承するとともに、地域づくりにとどしどし生かしてください。そういった活動に、市役所は段取り屋に徹して参ります。

本市においては、すべての人が住み慣れた地域で、安心して暮らせるまちを目指して、地域包括支援センターを中心に医療・福祉・保健の連携による安心ネットワーク体制の充実に取り組み、「住みやすさ 日本一」が実感できるまちづくりを推進しています。

今後も、民生委員・児童委員の皆様には、変わらぬご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後に、民生委員・児童委員の皆様がますますのご活躍とご健勝を心からご祈念いたします。

# 部会活動

## 第四部会「児童・家庭福祉部会」

心身ともに健やかな子どもの成長を願った活動を

守山市民生委員児童委員協議会では、委員全員が第一部会から第四部会のいずれかに所属し、月1回の会合を開き、地域や個別援助活動に必要な情報交換や関連施設の訪問、知識・技術習得のための基礎研修などに努めています。今回は、第四部会「児童・家庭福祉部会」の中道部会長から日頃の思いや活動状況などについて語っていただきました。

大分県教育界の不祥事をはじめ、昨今のさまざまな出来ごとを見聞きし、やり切れない気持ちにとらわれている人も多いのではないだろうか。昔からの日本の贈答文化、何を今更とお思いの方もおられるかも知れない。しかし、事は教育。公平・公正を教える立場の方が、これでは社会を律しようがない。教育は公平・公正だけではなく、あらゆる社会悪を防ぐ根本である。最近、子どもを教える前に「親学」なる至言があるが、また一つ「師学」というのも付け加えねばならない。

その一方で荒れる児童・生徒に悩み、休職に陥る先生が多くおられるのに、このように安逸をむさぼる先生群もある。まさしく混迷社会である。

教育は学校だけではなく、家庭はもちろん、地域や職場、社会全体、そしてお爺さん、お婆さん、親、子、孫、ひ孫と連綿と続く世代を超えた普遍的・ユニバーサルな姿でないと目的は成就しない。

吉身小学校では「共育」というスローガンを掲げておられるが、共に育む精神は、今の混迷社会への確かな発信と受け止めている。子どもたちの豊かな心、想像力を育むには今一つ感謝の心が大切である。その源となるのは、自然・神仏への畏敬の念ではなからうか。こういった目に見えないものへの恐れ、敬う姿が消えつつあるのは、今の社会に大きな影響を与えている。児童・家庭福祉部会は、少しでも子どもたちが「心身共に健やかに」を思い、そして水が大地に染み込んで行くように地道に息長くを念頭に35名が互いに啓発し合っているグループである。

<b>第四部会</b>
<b>児童・家庭福祉部会</b>
児童・家庭福祉問題に関すること
<b>第一部会</b>
<b>生活自立支援福祉部会</b>
低所得者福祉問題に関すること
<b>第二部会</b>
<b>高齢者福祉部会</b>
高齢者福祉問題に関すること
<b>第三部会</b>
<b>障害者福祉部会</b>
障害者福祉問題に関すること

# 学区だより

やりがいのある  
民生委員児童委員協議会

吉身学区



20年度の県外研修にて

昨年12月1日の一斉改選で女性19名、男性7名の26名(内主任児童委員2名)で新しくスタートしました。

吉身学区の現在の人口は約15,700人、世帯数は約5,900戸ですが、各委員が分担して個人の人格を尊重し、その身上に関する秘密を守り、差別的な取扱いをすることなく実情に即した支援活動を続けています。

吉身学区民児協の基本方針は「和」です。月1回の民児協で仲間と出会い、互いの苦勞を分かち合い、認め合うことで、苦勞も吹っ飛び、やりがいのある民生委員児童委員協議会となるよう努力しています。

今後も、この「和」を大切に、更なる支援活動を進めていきたいと思っています。

地域住民の皆さま方のご支援ご協力よろしくお願いたします。

# 活動日誌

## 河西学区

### 河西幼稚園の七夕飾り作りのお手伝いに参加

7月1日、河西学区社協のボランティア部会の活動として、民生児童委員とボランティアの方々が、河西幼稚園で開催される七夕飾り作りのお手伝いに参加しました。



また、6月守山北中学校・7月河西幼稚園・8月河西小学校と学区内の幼・小・中の先生方との懇談会をもち、子ども達の健全育成について話し合いました。夏休みに入ってから、地域の商店街へ出向き、街頭啓発活動を実施しました。

## 玉津学区

### 学区内の保育園・幼稚園・小学校を訪問

玉津学区の民生児童委員は、学区内の保育園・幼稚園・小学校を訪問し、懇談会をもちました。

お伺いした各校園の取り組みを聞いたり、地域の様子を話し合い、情報交換をしました。

また、子ども達の様子を見させていただき、今後の活動に活かせるようにしていきます。



## 小津学区民児協 広報活動で受賞

平成20年6月5日(木)、滋賀県社会福祉協議会(滋賀県立長寿社会福祉センター)にて表彰式がありました。

啓発をテーマとしたポスターの部として「子どもの事故防止」で小津学区民生委員児童委員協議会が努力賞に選ばれました。また、リーフレットの部でも「小津の子育て知恵袋」が佳作として選ばれました。

今後も地域の方に啓発を広め、活動の周知に努めていきます。

## 編集後記

祝日法は、敬老の日の趣旨を「多年にわたり社会につくしてきた高齢者を敬愛し、長寿を祝う」としています。元々は兵庫県下の一村で「高齢者の知恵を借りて村づくりをしよう」と、農閑期に敬老会を開いたのが始まりです。高齢者には常に「人生の達人」として接したいものです。

(宮坂記)

九月一日は、関東大震災にちなんで防災訓練が行われます。中国四川省、岩手・宮城内陸や東



北の地震の記憶は生々しいところですが、防災訓練への参加と日頃の見守り活動により、災害発生時には一人の犠牲者も出さないご近所付き合いの力を発揮したいものです。

(石原記)